東日本大震災から3年
東松島市の現状

2011年（平成23年）3月11日に発生した東日本大震災で、甚大な被害を受けた宮城県東松島市。熊本県では、行政支援として県と市町村合同で職員を派遣する「チーム熊本」を結成し、復旧復興に向け活動を行ってきました。震災から3年。東松島市の現状を、同市の報告に基づきお知らせします。

これまでにいただいた支援

東日本大震災発生後の東松島市には、これまで熊本県の皆さんから多くの支援をいただいています。

震災発生直後の2011年4月から12月まで、熊本県の県職員・市町村職員による合同支援チーム「チーム熊本」（全34次）が東松島市に派遣され、市役所での災害対応窓口業務や申請書類の整理、市内でのボランティア活動など多岐にわたるご支援をいただきました。

2012年4月からは熊本市職員および熊本県内の市町村職員約40人が、東松島市の復興事業を担うため、最長1年間にわたり長期派遣されています。

また、熊本県内の小学校から被災した東松島の学校へ支援米を提供、熊本市図書館より東松島市図書館への移動図書館バスの貸し出しなど、さまざまなかたちで、ご支援いただきました。

そして、熊本県PRキャラクター「くまモン」も、被災した東松島市の保育所などを訪れ、子どもたちを励ましてくださいました。

震災から３年　復興を実感する2014年へ

2013年の復興へ向けた歩みを、
「市報ひがしまつしま」に掲載された写真で紹介します

３年ぶりに７・８月の日曜限定で開設した宮戸（みやと）・月浜（つきはま）海水浴場
（2013年７月撮影）

震災前、野蒜（のびる）・宮戸（みやと）地区には海水浴に適した海岸が数カ所あり、夏季は多くの海水浴客で賑わいました。しかし震災で発生した津波のため、砂浜の流失や海水浴客を受け入れる交通機関、観光施設などが壊滅的な被害を受けました。海水浴場の海岸があった宮戸・月浜地区では、地域の皆さんが海水浴場の再開のために、ガレキ撤去や避難誘導などを含めた海水浴客を受け入れる態勢を順次準備し、2013年７～８月の日曜限定で海水浴場を開設。期間中（６日間）約6,400人が訪れました。

上空から見た奥松島「絆」ソーラーパーク全景
（2013年６月撮影）

奥松島「絆」ソーラーパークは、復興と「環境未来都市」を支援する民間企業からの事業提案から実現したものです。面積は4.7haで、東京ドームとほぼ同じ広さの敷地に縦166.2㎝、横99㎝の太陽パネルが14,616枚並べられています。発電能力は約2MW（1,999kW）で、一般家庭の約600世帯に相当する発電が可能。発電した電気は、すべて電力会社に売電します。敷地内に高さ４ｍの築山があり、環境学習の場として自由に見学することができます。

東松島市の現状と課題

現在、被災した東松島市民の皆さんが市内の1450戸以上の仮設住宅に入居し、また市内外の民間賃貸住宅などで今後の生活や将来の展望を模索しています。

今後の大きな課題として「住宅の再建」「公共交通機関の復旧」「雇用の確保と地域経済の復興」などが挙げられます。特に快適な住環境と安定した雇用の確保が実現しなければ、本市からの人口流出を招きかねません。

東松島市では、被災した市民の皆さんにとって「災害に強く安全なまち」「安心して笑顔で暮らせるまち」となるよう、内陸部への集団移転先の造成工事と災害公営住宅の建設・入居、併せて市民の住宅再建を推進しています。同時に、新たな地域コミュニティの形成・再構築のため、市と市民が一体となって協働で取り組む組織を立ち上げました。

また、持続可能で新たなライフスタイルとなるモデル都市を目指し、3年前、東松島市は国の環境未来都市の認定を受け、昨年夏には野蒜海岸近くにメガソーラーが完成しました。そして、震災後から不通となり、代行バスでの運行が続いているJR仙石線は、鉄道路線を内陸部に移して平成27年中に開通予定です。

津波で被害を受けた農地や漁港・河川海岸の堤防の復旧工事が現在も進められ、地域経済の担い手である市内の事業者たちも、それぞれの業種・分野で頑張っています。

熊本と東松島の「絆」

復興への道のりはまだまだ長く険しいものがあります。これからも、被災地・東松島のことを想うこと、記憶することだけでも、大きな支援になります。

熊本県と東松島市の縁と絆が、これからもより一層深まることを願っています。

東松島市総務課
小山淳志さん

4月入居開始予定の小松谷地地区災害公営住宅の現場見学会（2013年11月撮影）

東松島市における災害公営住宅の整備概要について、戸建型および集合型の災害公営住宅として約1,000戸を整備。今年4月には、小松谷地地区災害公営住宅をはじめとする約250戸が完成し、順次入居を開始予定。なお、2017年（平成29年）度までに順次整備、完成・入居していく予定。

震災による死者・行方不明者1,134人にも上った東松島市。村からも「チーム熊本」の一員として職員11人が派遣され、また、多くの人たちが、さまざまな形で支援されています。

東日本大震災から3年。復興は進んでいますが、まだ多くの課題が残されています。災害は、過去のことではなく、2012年（平成24年）の九州北部豪雨災害のように、私たちの身にも起こりうることです。多くの犠牲を無駄にしないためにも、災害から学んだ教訓を今後に生かし、後世に伝えていくことが、大切ではないでしょうか。

震災の影響で休止していた嵯峨渓遊覧船が「奥松島遊覧船」として運航スタート（2013年10月撮影）

日本三景の一つ、松島の東として一角をなす東松島市の宮戸地区（宮戸島）には、松島湾が眺望できる4カ所「松島四大観」の一つで、壮観の異名を持つ『大高森』や、日本三大渓の一つ『嵯峨渓』などがあり、海に囲まれた自然景観に恵まれたまちとして、多くの観光客が訪れていました。特に、『嵯峨渓』は岩手県の猊鼻渓、大分県の耶馬渓とならぶ日本三大渓のひとつで、宮戸島から海に突き出た半島の断崖が、太平洋の波が人間にとって永遠とも思える歳月をかけ、岩肌を少しずつ削られて美しい景観を成した自然の産物です。女性的でやさしい印象の松島と対照的に、切り立った崖や鋭利な岩肌が男性的で荒々しい印象を与えてくれます。この嵯峨渓をめぐる遊覧船が震災前に運航していて、多くの方が訪れていました。

しかし震災で発生した津波のため、遊覧船や発着場が壊滅的な被害を受けました。ガレキ撤去や避難誘導等を含めた観光客を受け入れる態勢を順次準備し、2013年10月に「奥松島遊覧船」として運航を再開しました。